

## 「大切なこと」

高知県 須崎市立朝ヶ丘中学校 3年

寺村 優奈（てらむら ゆうな）

「ねえ、優奈だったらどう思う。」

新聞を置いた母は、ゆっくりと昔のことを話し出しました。それは母が学生時代、レストランでアルバイトをしていた時の体験でした。

ある日、車椅子に乗った方とその方を介助していた人が、トイレを借りるために店内に入って来られました。その時、店長さんは、

「ご飲食されない方のトイレの使用については一律五百円いただいております。」

と伝えたのでした。その店長さんの言葉を聞いた介助の人は、

「この人は障害者なんですよ。」

と、店長さんの対応に驚いたような口調で言いました。しかし、店長さんはそれでも店の方針を変えなかったそうです。そして、二人はそのままバスで帰っていったといいます。

私は母からこの話を聞いて、

「店長さんの対応は当たり前やん。」

と答えました。私の言葉が意外だったのか、母は目を丸くして、

「どうしてそう言い切れるが。でも、すごい。私が今でも答えに迷うことを優奈はちゃんと判断できるがや。」

と言いました。

母は高校生の頃から、ボランティアサークルに所属し、障害者の人達との交流が多くありました。そこで学んだノーマライゼーションという、障害者と健常者が助け合いながら暮らす社会のあり方が身についていたので、店の対応に疑問を感じつつも、介助者の方の「この人は障害者なんですよ」という一言が心に引っかかっていたといいます。

私はこれまで色々な場面で沢山の人権教育を受けてきました。障害者も健常者も、みんな同じ尊い命です。「障害者は特別な存在」、「障害者はかわいそうな人」という考え方は間違いで、障害者にとって障害は「個性」なのだと思えるようになっていました。だから、障害の有無に関係なく一貫した対応をとった店長さんは正しいと、まっすぐな気持ちで答えることができました。

しかし、私は障害者との交流がほとんどありません。習った知識だけでしか、障害に対して理解していないと気が付きました。障害者ともっと交わることがあ

ったなら、私の中の答えも変わっていたのかもしれないと思います。

看護学生だった母は、身体機能の低下がもたらす生活の困難さや、障害者を取り巻く社会情勢について学び、障害者の障害を、「個性」という側面だけで見る事が出来なかったと話していました。障害者が自分の障害を個性だと語るなら、それはその人にとっての個性だと思います。けれど、その個性の裏には、健常者が知ることのない様々な生活のしづらさがあります。だからこそ相手を思う心が必要だというのが母の本音です。

教科書通りに障害者を理解しようとする、本当に大切にしなければいけない根本的な部分を見落とししてしまうかもしれないと感じました。

ここまで考えを深めて、やっと私は介助の方の一言の、違和感の正体が分かった気がしました。

たぶん、あの時の介助の方は、正義感にあふれていたのだと思います。「障害者という社会的弱者を私が守らなければ」「皆が支え合う社会が当たり前だから、店の対応は間違っていないか」そう伝えたかったのではないかと思います。けれど、一番大切にしなければいけなかったのは、介助の方の発した言葉を頭上で聞いていた、車椅子の方の気持ちではないでしょうか。

自分の身体を信頼してあずけている人に、「この人は障害者なんですよ」と言われた時の車椅子の方の気持ちを想像すると、私は胸が痛くなります。自分を「障害者」としてしか見られていなかったことへの驚きと悲しみの気持ちで一杯だったのではないのでしょうか。

母の心に長年このことがつかえていたように、車椅子の方の心にも、ささいな日常の一コマが、消化されずにすみついているのかもしれない。

私は最初にこの話を聞いて、すぐに「店長さんは正しい」と判断しました。でもそれは十五歳の私の小さな世界で出した答えです。きつこの先、沢山の出会いや経験をしたいと思います。一つ一つの出会いを大切に積み重ねていくと、今回の私の答えも変わって、今のような気持ちで、誰が正しいかと言えなくなる日がくるかもしれません。でも、一つだけ迷わず持ち続けたいと決めたものがあります。それは、障害者は障害がある人であって特別ではない。でも健常者も障害者も共存していく社会の中では助け合う心が大切だということです。

十年先、二十年先、またこの出来事を考えてみたいです。その時の私はどんな答えを出すのか楽しみです。